

戦後日本におけるアメリカニゼーション*

—JACK AND BETTY を通して—

岩 本 茂 樹**

はじめに

アメリカの占領の下に戦後の日本がスタートしたことからも、アメリカを抜きに戦後日本を語ることはできない。安田常雄は「戦後50年になる現在、私たちはほとんど全身で「アメリカ的なもの」を生きている」[安田、1995]と、日本が「まるごと」アメリカナイズされたかのように述べている。しかし、戦後の日本がアメリカに強く影響され、かつアメリカの文化を受容し歩んできたとしても、アメリカの文化のありのまますべてを受容したと言えるのであろうか。言い替えるならば、アメリカへのイメージが実在するありのままの姿であり、そのイメージから「まるごと」アメリカナイズされたと一口に片付けて良いのであろうか。そこには日本独自のアメリカのイメージ形成とそれに基づく文化受容があったのではないか。

もちろん、亀井俊介にしても「日本人はアメリカの生活文化を受け入れる過程で日本化してきた。すなわち、日本のアメリカナイズーションはアメリカをジャパナイズーションすることであった。」[亀井、1979]と、文化受容過程において日

本独自のアメリカ文化受容があったと主張はする。しかし、文化受容の独自性とは、アメリカの文化のありのまますべてを受け入れる過程においてのものなのか、はたまた日本人々々によるアメリカ文化のある種の「選択」といった偏りを示す独自性なのかを明らかにしたわけではない。筆者としては、「戦後日本におけるアメリカニゼーション」は「日本独自のもの」とのスタンスをとりながらも、「ある種偏ったアメリカのイメージからの文化受容ではなかったか」との仮説のもとに、「戦後日本におけるアメリカニゼーション」の実態を解明したい。¹⁾

研究対象とする時代については、現代を読み解く鍵として敗戦直後を示唆する鶴見俊輔に依拠して、アメリカ文化の受容の骨組を捉える目的から敗戦直後にスポットを当てた。²⁾

本稿では、(1) アメリカへのイメージが実在するありのままの姿から生じるものでなく人々が互いに協力して創り上げていったものだとすればアメリカのイメージとはどのようなものなのか、(2) そのように認識されるようになった敗戦直後の社会的要因とはどのようなものなのか、(3) イメージ形成と文化受容が浸透していく過程にお

*キーワード：ジャック アンド ベットィ、バイアス、アメリカニゼーション

**関西学院大学大学院社会学研究科研究員

1) 本稿は、1998年5月23日甲南大学において開催された第48回関西社会学会大会にて報告した「ジャック アンド ベットィ —戦後日本におけるアメリカニゼーション—」をもとにしたものである。

なお、これまでの筆者による「戦後日本におけるアメリカニゼーション」研究には、拙稿「ブロンディ (1) —戦後日本におけるアメリカニゼーション—」(『関西学院大学社会学部紀要』第78号、1997年)、「ブロンディ (2) —戦後日本におけるアメリカニゼーション—」(『関西学院大学社会学部紀要』第79号、1998年)がある。

2) どの時代のどの時刻をとってもそこには人間の歴史の断面があり、そこから人間を理解する手がかりがあるわけだが、今を理解する手がかりはみえにくいとする鶴見俊輔は、「1945年8月15日とそのあとの日にもどして、そこで見る時、日本の国の骨組、日本文化の骨組が、レントゲン写真で見るとあざやかに見えるような気がする」と、現代を読み解く鍵として敗戦直後を示唆する。(『思想の落し穴』岩波書店、1989年 p. 138)

本稿では、鶴見俊輔の示唆に依拠して、戦後の日本がアメリカのどのような文化を受容して現代に至ったのかの手がかりは現在においてもあるはずだが、アメリカ文化の受容の骨組を捉える目的から敗戦直後にスポットを当てた。

いてどのような「力の作用」が働いていたのか、を明らかにすることを課題とする。これらの課題を解明するために、戦後まもない昭和23年（1948年）に民間から発行され、全国の約8割の学校で採用された中学の英語教科書 *JACK AND BETTY* を採り上げ検証してみることにする。

1. 英語教科書 *JACK AND BETTY*

1-1 時代がつくる教科書

図1は昭和19年（1944年）の戦中の英語の教科書である。地図にしても、国旗にしても日本のもの、また人物についても同世代を打表する国民服をきた学生、卓袱台を囲んだ父親を中心とした一家だんらんを描く挿絵が挿入されている。それゆえ、人物名も、「This boy is Taro.」「Mr. Tanaka」と日本人であり、日本語の会話がただ英語に代えられたものにしかすぎない。それに対して、図2の *JACK AND BETTY* では、「I am Jack Jones.」「I am Betty Smith.」と、主人公は Jack と Betty というアメリカの同世代の子どもで挿絵もアメリカの生活を描いたものである。さらに、図3は平成4年開隆堂出版発行の *SUNSHINE ENGLISH COURSE 1* である。主人公の岡久美がアメリカから来たエミリーを家に招く。そこ

には、すでに中国の王力も来ている。そして、今度は久美がアメリカに渡って異文化を体験する。まさに、国際的な結び付きを基軸とした構成になっている。このように、英語の教科書一つ採り上げても、時代によって大きく異なり、社会的背景に影響を受けた構成となる。それだけに、教科書は貴重な時代を語る資料と言えよう。

現在50代の人々の多くは、戦後を振りかえる中で、折にふれ当時を懐かしむものとして *JACK AND BETTY* を挙げる。さらに、1949年に『ジャック アンド ベティ』を学んだ主人公達が、遠くにあったアメリカを超えようとする姿を描く小説『ジャック アンド ベティ物語 [いつもアメリカがあった]』まで登場するのである。³⁾ まさに *JACK AND BETTY* 世代というのが存在する。

1-2 *JACK AND BETTY* 誕生

復活した教科書検定制度によって、翌年使用される中学校用教科書の展示会が、昭和23年（1948年）に開かれた。当時は教科書採用に関しては、教師が直接手にとって決める学校採択であった。萩原恭平、稲村松雄、竹澤啓一郎の3人の民間人によってつくられた中学校英語教科書 *JACK AND BETTY, ENGLISH STEP BY STEP* は昭

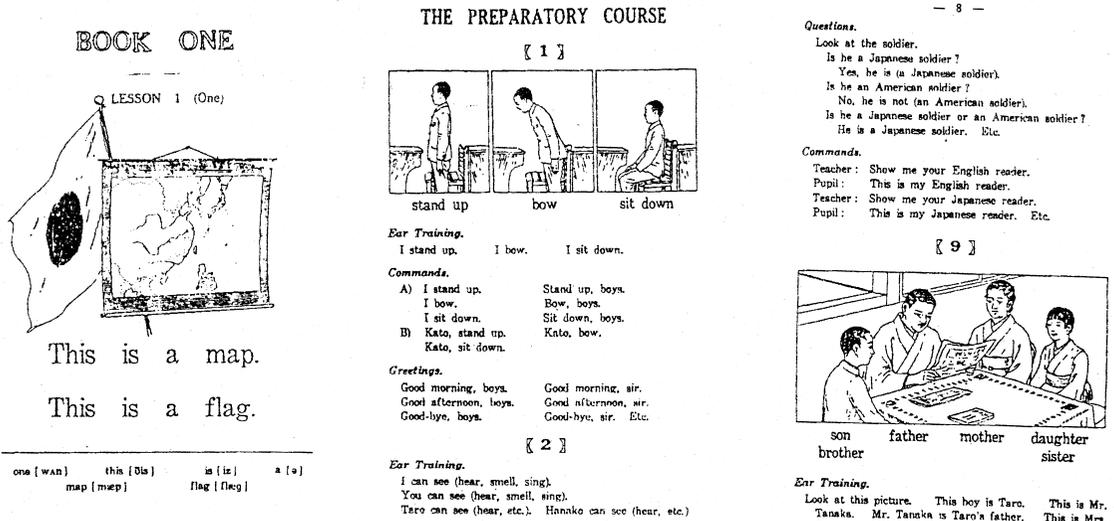
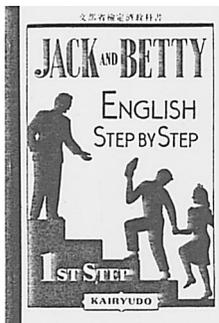
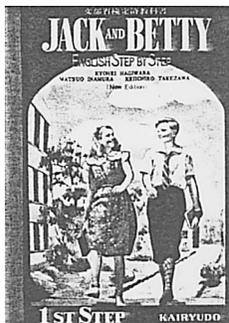


図1 戦中の英語教科書（『英語1 中学用』中学校教科書式会社1944年）

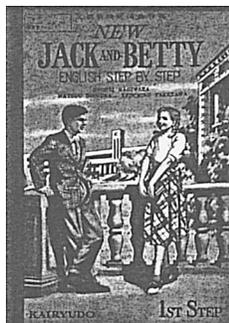
3) 今野勉・堀川とんこう『ジャック・アンド・ベティ物語 [いつもアメリカがあった]』開隆堂出版、1992年



S. 24~33年度用



S. 26~33年度用



S. 27~36年度用



S. 29~36年度用

LESSON 1 (One)

Betty



Jack

I am a boy.

I am Jack Jones.

*I am a boy.
I am Jack Jones.*

Jack I am a boy Jones

I am a girl.

I am Betty Smith.



Betty

*I am a girl.
I am Betty Smith.*

FOR STUDY

I am.....

{ a boy	{ a girl
{ Haruo Yamada	{ Akiko Suzuki

Betty girl Smith

図2 出版された JACK AND BETTY と S. 24~33年度用の LESSON 1

和23年に発行され、この展示会に提出されたのである。⁴⁾ 昭和23年の7月に全国各地の教科書展示会が催され、7種類の教科書の中から **JACK AND BETTY** が全国の4割の学校で採用された。さらに、翌昭和24年7月に行われた昭和25年度用教科書の展示会においては16種類の教科書の中から、全国の中学校の8割が採用した。まさに **JACK AND BETTY** は当時の現場の教師に圧倒的に支持され、少なくとも約300万人の中学生に

読まれたのである。

では、このように現場の教師に圧倒的な支持を集めた **JACK AND BETTY** はどのような編集方針のもとに創られたのであろうか。

1947年3月20日文部省が出した英語科の指導要領試案の第一章で英語の目標が述べられている。「読み」「書き」「話す」こと以外に、「英語で考える習慣を作ること」、「英語を話す国民について知ること、特にその風俗習慣および日常生活について

4) 開隆堂出版においては、1949年~74年までの「ジャック時代」(26年間)、1962年~86年までの「プリンス時代」(25年間)で、62年から71年まで9年間は並行していた。この間改訂版も含めて10種類の **JACK AND BETTY** が出版されている。(稲村松雄『教科書中心 昭和英語教育史 英語教科書はどう変わったか』開隆堂出版、1986年 p. 75) 本稿では初版本の **JACK AND BETTY, ENGLISH STEP BY STEP**, (1948年~58年)を研究対象として設定する。なお、この節では稲村松雄『教科書中心 昭和英語教育史 英語教科書はどう変わったか』と、柳瀬尚紀『「ジャック&ベティ」の英語力で英語は読める』を参考にした。



図3 SUNSHINE ENGLISH COURSE 1

て知ること』⁵⁾と、英語を母国語とする人々の生活習慣を基盤に据えて英語を学ぶ方向を示している。それゆえに、*JACK AND BETTY* をつくるにあたって大きな影響を与えた文部省から出された英語の教科書『レッツ ラーン イングリッシュ (*Let's Learn English*)』は、第1巻の第1課が「I am Tom Brown.」からスタートし、トム個人から家庭生活へと進んでいく一貫したストーリー展開で構成されていた。

特に稲村は戦前からデューイの提唱するコア・カリキュラムに傾倒し、知識のために知識を学ぶのではなく教科のワクを超えた社会生活の中で起こる現実の問題を総合的に学ぶような教科書にしたいとの構想を抱いた。そこで、同世代の少年少女の生活からアメリカの社会生活を学ぶといった基本枠組みのもとに第一巻から第三巻まで統一した教科書を目指した。テクニカルな面では、表現の母体となる風俗習慣を盛り込むこと、当時の国

内の混乱から暗い話題を入れないこと、また本文理解の助けとして挿絵を入れることが確認された。なお地域設定については、竹沢と親交のあるシカゴ近郊のエヴァンストン出身のアメリカ軍将校の話を参考にした。かくして、シカゴ近郊のエヴァンストンに住み、シカゴの工場で働く技術者を父とする少年ジャックと、シカゴの商店主を父とする少女ベティとを中心に、当時のアメリカの学校及び中流家庭生活を表す教科書が誕生したのである。

2. あこがれの *JACK AND BETTY*

「自分の中に、小学唱歌が生きつづけているのにおどろくことがある。小学校の全教科書のなかで、小学唱歌が、思想的にはもっとも大きな影響を私に対して、今ももちづづけている。」⁶⁾と、自己の中に生きづく小学唱歌を語る鶴見俊輔

5) 紀平健一「戦後英語教育における *Jack and Betty* の位置」『日本英語教育史研究 第3号』、1988年 p. 179

6) 鶴見俊輔「解説」清水義範『永遠のジャック&ベティ』講談社文庫、1991年 p. 228

は、

『ジャックとベティ』は敗戦直後の英語の教科書で、明治つくられた小学唱歌とはかけはなれた気分をもちこんでいる。英語は大正生まれ、昭和生まれの子どもにとって明治が理想であったように、戦後すぐの時代にとって、アメリカの精神がそれをつたわって日本人の心に入ってくる道すじであって、英語の教科書は戦後の理想をもちこむテキストであった。』⁷⁾

と、*JACK AND BETTY* の英語教科書がこの教科書を手にした生徒たちの精神におおきく影響を及ぼしたことを示唆する。現在にまでこの教科書で学んだ生徒たちの心を強く捉えるのは、単に敗戦という特別な状況だけでなく、この教科書を通して心に描かれたイメージが焼き付いているからであろう。鶴見の意見に従って、*JACK AND BETTY* がアメリカの精神を伝える役割を果たし、日本人の心に入ってくる道すじであったとするならば、*JACK AND BETTY* に描かれた内容と、生徒の受けた印象を分析することで、アメリカ文化の何を読み取ったのかが明らかになろう。

それでは、*JACK AND BETTY* で学んだ人々の心に焼き付いたものはどのようなものであったのだろうか。心に残る思い出を取り上げ、当時の生徒たちが教科書を通してどのようなアメリカのイメージを描いたのかを明らかにしてみよう。

「ジャックとベティが住む家、広い芝生や教室、いかにも明るい理想的な家庭。そんな絵をみてアメリカの豊かな生活を創造するのが楽しかった。』⁸⁾

と、語る翻訳家の小沢瑞穂と同じく“生活の豊かさ”に強く印象づけられた TBS プロデューサーの堀川とんこうは次のように述べる。

「学生生活も家庭生活も、僕らの目にはまぶしいほどに明るく輝かしく映った。もちろん、最初にこちらの目に飛び込んできたのは、生活の豊かさでしたけど、それだけじゃないものが

あった。

今と違って、友達の家遊びに行ってもおやつにさつまいもが出ればいいほう、という時代でしたからね。それが、例えば Betty の家にはテニスコートがあって、おやつは紅茶とパイ。お父さんとお姉さんがそれぞれ車もっているわけですね。いったいどういう生活なんだろうと、うらやましくも思い、あこがれもしました。』⁹⁾

堀川は *JACK AND BETTY* から印象づけられたアメリカの“生活の豊かさ”の指標として、紅茶とパイといった食べ物、住まいにあるテニスコート、そして車を挙げる。俳優の山口崇にしても、

「ジャックは半袖のシャツにネクタイ。ベティのほうは日本の女の子が正月でもきられないようなしゃれた服。どう動くのか皆目見当もつかない洗濯機や掃除機。植樹日のことなど、どこをどうひねっても僕には想像もつかなかった。』¹⁰⁾

と語り、服装と洗濯機や掃除機などの「家庭電化製品」に目が注がれている。

ところが、翻訳家の青山南は、

「記憶に自信がない。*JACK AND BETTY* が教科書だったような気がするし、そうでなかったような気がする。』¹¹⁾

と、上記の3名とはまったく異なった印象で *JACK AND BETTY* を語るのである。

そこで、*JACK AND BETTY* についての思い出を語る人々の話を表にまとめてみることにした。年齢順に基づいて作成したものが表1である。*JACK AND BETTY* の教科書であったかどうかの記憶もさだかでない青山南は昭和24年生まれであり、昭和20年生まれの小栗康平にしても「不思議な、うれしい気持ち」とのぼんやりとした感想にすぎない。それぞれが語る *JACK AND BETTY* だが、昭和24年の初版本 *JACK AND BETTY* を手にしたと思われる昭和11年生まれの

7) 鶴見俊輔 前掲書 pp. 228-229

8) 小沢瑞穂「ローティーン時代のピクニック・ランド」柳瀬尚紀 前掲書 p. 45

9) 堀川敦厚「『ジャック・アンド・ベティ物語』制作余話 「イリノイ州エヴァンストン・シュリダンロード7800番地」『*JACK and BETTY* あの日あの頃』(復刻版付録ブックレット) 開隆堂出版、1992年 p. 23

10) 山口崇「突然天然色になった日」柳瀬尚紀 前掲書 p. 99

11) 青山南「ヒラリンと東京オリンピックと」柳瀬尚紀 前掲書 p. 108

表1 J&Bの思い出

名前	職業	生まれ年	印象	備考
山口 崇	俳優	昭和11年 (1936)	総天然色になった 〈電気製品 (洗濯機、掃除機)、 植樹日〉	
今野 勉	演出・脚本家	昭和11年 (1936)		小説『ジャック・アンド・ベ ティ物語 [いつもアメリカが あった]』 ^a
堀川とんこう	TBSプロ デューサー	昭和12年 (1937)	生活の豊かさ 〈Betty家のテニスコート、車、 紅茶とパイ〉	小説『ジャック・アンド・ベ ティ物語 [いつもアメリカが あった]』 ^a
湯川れい子	音楽評論家	昭和14年 (1939)	精神と肉体の飢えを満たす	
小沢 瑞穂	翻訳家	*昭和15年 (1940)	豊かな生活 〈家、芝生、チョコ、アップル パイ〉	翻訳の原点としてのJ&B
枝川 公一	エッセイスト	昭和15年 (1940)	憧れのアメリカン・ライフ	
亀海 昌次	グラフィック デザイナー	昭和15年 (1940)	ミルクバター的生活 アルファベットの合理性や虚 構性	
山本 圭	俳優	昭和15年 (1940)	モダンな挿絵に強い印象	
大宅 映子	評論家	*昭和16年 (1941)	輝かしい憧れの対象	
柳瀬 尚紀	翻訳家 エッセイスト	昭和18年 (1943)	現実のアメリカが光輝く未来	『『ジャック&ベティ』の英語 力で英語は読める』 ^b
小栗 康平	映画監督	昭和20年 (1945)	不思議な、うれしい気持ち	
清水 義範	小説家	昭和22年 (1947)		小説『永遠のジャック ア ンド ベティ』 ^c
青山 南	翻訳家	昭和24年 (1949)	J&Bの教科書かどうか記憶が あいまい	

注

表は資料(『JACK and BETTYあの日あの頃』開隆堂出版、1992年、柳瀬尚紀『『ジャック&ベティ』の英語力で英語は読める』開隆堂出版、1987年)をもとに作成した。

*文脈からの推定した生まれ年である。

a 堀川とんこう・今野勉『ジャック・アンド・ベティ物語 [いつもアメリカがあった]』開隆堂出版、1992年
1992年8月10日、17日 午後9時～10時 TBSテレビ放送にて放映(スーパーバイザー：筑紫哲也) 再放送：1996年8月14
日、15日 午後2時～3時

b 『『ジャック&ベティ』の英語力で英語は読める』開隆堂出版、1987年

c 『永遠のジャック アンド ベティ』(講談社、1988年) 会話形式のパロディ小説

山口崇から昭和18年生まれ柳瀬尚紀にはアメリカのイメージが語られ、なお昭和15年生まれの山本圭までは、イメージ形成の指標までも語っているのである。これらは、*JACK AND BETTY*との出会いの時代背景によって明確に思い入れの差が存在することを示している。日本が昭和27年(1952年)まで占領下にあったことだけではなく、敗戦後の日本の経済及び社会状況によって育つて

きた子どもたちの、教科書を見るまなざしが大きく影響された証でもあろう。

ただし、指標を上げながら *JACK AND BETTY*の印象を述べる昭和24年から28年頃に中学生であった人々の言説を整理してみると、ベティの広い芝生やテニスコートのある家や食べ物、さらに車や洗濯機・掃除機などの家庭電化製品に目がそそがれ、それらをもとにアメリカの“豊かな生活”

をイメージしていることが伺える。この豊かさに支えられた明るい生活、その生活をあこがれの生活として心に強く焼きつけたのである。

3. 実際の JACK AND BETTY

著者達は、特に言語表現を生む母体となった風俗習慣を知らせようとの目標をもっていた。3RD STEP の14課 THANKSGIVING DINNER では、

When all had taken their seats, Mr. Smith gave the blessing:

“We thank thee, our Father, for this food and for all good things with which thou hast blessed us. Amen !”^{*12)}

と、食事前における特別なキリスト教の祈りまでが盛り込まれている。もちろん、通常の会話文でないところから、注として*の記号が示され、

*“We thank you, our Father, for this food and for all good things with which you have blessed us. Amen !”

と、欄外に理解できる英文が添えられてはいるのだが、アメリカの生活習慣を紹介しようとする使命感の強すぎる結果とさえ思われる文章である。

では、JACK AND BETTY を手にすることで、物質文明に基づく豊かな国アメリカのイメージが結晶化され、そしてあこがれの生活へと導かれる当時の生徒達の強く印象づけられた「食べ物」、家庭電化製品及び車といった「科学技術」はどのように取り扱われていたのであろうか。2ND STEP の14課の Automobiles で、

In 1941 about 4,000,000 passenger cars and about 1,000,000 motor trucks were made. In that year there was one car to every four people in the United States.¹³⁾

と、アメリカでは4人に1台車を持っていることが紹介されている。

これだけでは、実際の JACK AND BETTY に盛りこまれた内容を比較することができない。そこで3年間のレッスンのテーマを分類分けし、とり扱われた内容量をかぞえあげ表にした。その表

Aからは、学校と家庭を題材にした課は12と8のあわせて20、さらにクリスマスやリンカーンといったアメリカの年中行事や歴史的人物に関わった課が総レッスンの18.9%にあたる14と取り扱われているが、「食べ物」も「科学技術」も総レッスン量の4.1%と少ないことがわかる。

著者たちは、英語教育を大前提として、ジャックとベティという二人の主人公によるアメリカの家庭生活と学校生活を描きつつアメリカの社会生活を学ばせようとするものであって、決してアメリカの物質文明の“豊かさ”を伝えようとしたわけではなかったのである。

表A 『ジャック アンド ベティ』のレッスンのうちわけ

	1年	2年	3年	合計	
年中行事・祝祭日	1	5	8	14	18.9%
学校	6	6	0	12	16.2%
家庭	7	1	0	8	10.8%
食事	2	0	1	3	4.1%
科学技術	0	2	1	3	4.1%
総レッスン	30	24	20	74	

*総レッスン量には他の分類に入るレッスンも含まれている。オートモービル(車)や家庭電化製品については「科学技術」としてまとめた。

主なレッスンの内容

- 1年一年中行事・祝祭日(クリスマス1)食事2(ティ1 朝食1)
- 2年一年中行事・祝祭日5(洗濯日1、コロンブスデイ1、クリスマスの休日1、ワシントン1、ワシントンと桜の木1)
科学技術2(ラジオ1 オートモービル1)
- 3年一年中行事・祝祭日8(感謝祭とクリスマス4、植樹2、独立記念日1、リンカーン1)
科学技術(近代農機1)

4. バイアスのかかった認識の構成

生徒達の「食べ物」や「科学技術」に対して強く心に残るといふ偏った認識、すなわちバイアスのかかった認識はどのようにして生じたのであろうか。その構成のメカニズムについて考察してみることとする。¹⁴⁾

図Bに示したように、著者達、著者によって

12) JACK AND BETTY ENGLISH STEP BY STEP 3RD STEP, p. 51

13) JACK AND BETTY ENGLISH STEP BY STEP 2ND STEP, p. 35

14) ここではバーガー/ルックマンによる議論をヒントに、外在化、客体化、内在化の概念を用いて考察する。[Pe-

生みだされた *JACK AND BETTY*、そして *JACK AND BETTY* を手にした生徒達にしてもその時代の社会という世界に取り囲まれた中に存在する。ゆえに当然、その時代の空気というものに大きく影響を受けるであろう。とはいえ、著者達と生徒達を取り囲む環境としての社会は、それぞれの生活基盤の違いから関わる事柄や人物の点で違いはあろう。まず、著者達に注目して見よう。戦後すぐに出版された英語教科書 *Let's Learn English*¹⁵⁾ がモデルであった。そのため、*Let's Learn English* の 'I am Tom Brown.' が 'I am Jack Jones. I am Betty Smith.' で始まるコア・カリキュラムに基づいたストーリー展開を基本方針とした。それにしても、ジャックとベティの生活からアメリカの社会生活を学ばせようとした著者達の「風俗習慣」が、キリスト教を中心とした「年中行事」を多く取り扱うことになったのは何故であろうか。モデルとなった *Let's Learn English* をみると、三巻は一口で言えば、アメリカの年中行事を描いている点で一貫している。さらに、この当時は文部省による検定以外に CIE による検閲が行われていて検定合格数は非常に少なかった。¹⁶⁾ ところが、*JACK AND BETTY* は「ほんの僅かな訂正の指摘を受けただけでパスした」¹⁷⁾ と、稲村は述べている。というのも、この時稲村はアメリカ進駐軍のテクニカル・アドバイザー

に就任していて、時に応じて粗稿を閲覧してもらっていたのである。これらの点からも著者達の身近には GHQ が取り巻いていたのである。そのため、著者達によって客体化された英語の教科書 *JACK AND BETTY* には、アメリカの年中行事は自明のごとくに取り入れるべきものであった。だからこそ、著者達の風俗習慣を知らせようとする思いは *JACK AND BETTY* の中では「年中行事」に置き換えられ、数多く取り扱われることになったのであろう。また、シカゴ近郊のエヴァンストンという地域設定についても、著者の一人竹沢と親交のあるアメリカ軍将校がシカゴ近郊のエヴァンストン出身であり、そこに住む少年少女の話の聞くことができたことによるものである。さらに、エヴァンストンはシカゴに仕事を持つ中流家庭の人が主に居住しているということから、中流家庭生活を表す教科書となったのである。

JACK AND BETTY を手にした生徒達はどうかであったのだろうか。最も多く取り扱われていた年中行事が生徒達には認識されてはいなかった。ジャックとベティの日常生活を通して登場する「食べ物」、車や家庭電化製品等の「科学技術」がすばやく彼等の目に飛び込んできたのである。このことは、H. ブルーマーが論じる「指示」にあたる選択的知覚と言えよう。¹⁸⁾ 彼等の目には *JACK AND BETTY* を手にする時点で、すでに

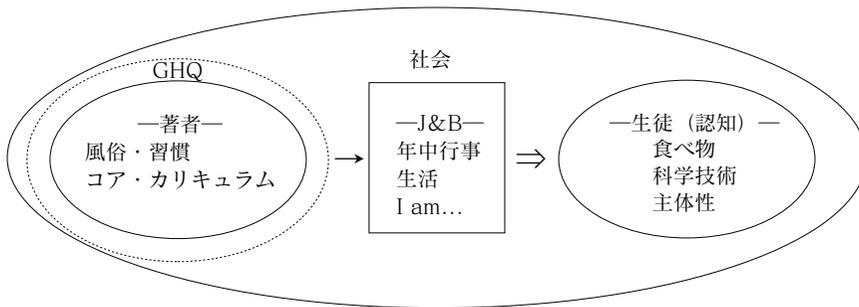


図 B

ter L. Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality*, New York, 1966. (山口節郎訳『日常世界の構成 アイデンティティと社会の弁証法』新曜社、1977年)]

- 15) 宍戸良平・木名瀬信也・曾田規知正編 *Let's Learn English*, 文部省、1947年
- 16) 紀平健一「戦後英語教育における *Jack and Betty* の位置」『日本英語教育史研究 第三号』、1988年 pp. 181-182
- 17) 稲村松雄『教科書中心 昭和英語教育史 英語教科書はどう変わったか』p. 108
- 18) H. ブルーマーは、『シンボリック相互作用論』の中で、「解釈の過程に置いて、行為者は意味をもつものごとを、

フィルターが掛けられていた。では、そのように起動させたものは何であろうか。当時の時代背景がそのようなフィルターを創り、そのように見る“認識枠組み(認知のものさし)”を構成していた。社会的に構成された“認識枠組み”が生徒達にバイアスのかかった**JACK AND BETTY** 認識へと導き、そしてアメリカのイメージを再構成したのではない。

そこで、次に“認識枠組み”構成の過程を捉えるために、敗戦直後から**JACK AND BETTY** が採用されるまでの新聞記事を追うことにする。¹⁹⁾

5. **JACK AND BETTY** 発行までに構成された“認識枠組み”

敗戦当日の8月15日、鈴木貫太郎首相は、「今回の戦争において最大欠陥であった科学技術の振興につとめよう」と述べ、敗戦の原因を「科学技術の差」と位置づけた。さらに、船田中氏談として、

「科学的思考性を国々の日常生活の中に深く浸透させて行くといふことによつて将来大科学勃興の基礎を築いていかねばならぬ。」²⁰⁾

また、「科学立国へ」と題した記事では、

「我らは敵の科学に敗れた。この事実は広島市に投下された一個の原子爆弾によつて証明される。前田新文相は就任に当たり科学を含めた広い文化の復興を図りたいと科学立国の熱意を述べた。科学の振興こそは今後の国民に課せられた重要な課題である。」²¹⁾

と、戦後日本のスタートを切るにあたっての方向性をめぐって、頂点とすべき理念は「科学技術」と提示するものであった。同時に、国民に向け前田文部大臣が次のように放送する。

「戦争中は敵として血みどろの戦いを続けて来たにせよ、戦をやめたらあとはさつぱりとして相手の手を握るのは昔からの武士道の仕来りであります。」²²⁾

と、武士道を引用してまでも、戦争責任は問うことなくいったん御破算にしようとする。また、吉川英治も、

「我々はいまどん底に来たのだ。敗戦の瞬間的な激情がゆるむにつれひしひしと敗戦国民の苦難、深刻な精神苦、生活苦に追いつめられて行くことを知るであらう。戦いに敗れたのだから男らしくこの難に耐え忍び、敵の要求に応じてやらう。」²³⁾

と、アメリカの占領を男らしく迎えようと訴える。このように、戦後日本のスタートを切るにあたって、まずはこれまでのことは御破算にし、「科学技術」を頂点とする知の枠組みが提示されたのである。

この「科学技術」を頂点とする知の枠組みが新聞紙上で権力を持って制圧する一瞬を物語る場面がある。それは、「計算」「合理性」をめぐる議論においてではあるが、注目すべきやりとりである。

大佛次郎が1945年8月21日に、「英霊に詫げる①」で次のように述べる。

「三千年來日本の歴史は決してすらすらと平坦な道を進んできたのではない。幾多の断層があつて飛躍をひつようとした。西洋流の計算や合理主義では解決できぬものを、私共の祖先は自分たちでさへ説明のできぬ方法で、苦しみながらも無造作に乗り越え、健全な後代を我々に遺してくれた。明治の門を開いた維新の世直しもそれであった。政治の技領は下手糞で、余計な犠牲を出しながらも、向かう道は誤らずに日本の

自分に対して指示(indicate)する」とする。Herbert Blumer, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice-Hall, 1969 (後藤将之訳『シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法』勁草書房、1991年)

19) 採り上げる記事はすべて『朝日新聞』で、誤字、当て字、送りがなはそのママとする。

なお、敗戦時は自己の服などを売ってでも食糧を手に入れようとしていた「たけのこ生活」の時代であった。このような耐乏生活から「食べ物」に関して非常に敏感に反応する時代であったがゆえ、「食べ物」へのバイアスのかかった見方となったのであろう。本稿では、アメリカニゼーションの研究テーマから「科学技術」についての“認識枠組み”構成の過程を捉えることを課題とする。

20) 船田中氏談「一路科学の勃興へ」、「こんな心構えで」1945年8月19日

21) 1945年8月20日

22) 「さあ、新しい元気で」1945年8月18日

23) 吉川英治「英霊に詫げる①」1945年8月23日

大を成したのが不思議なくらゐである。恵まれた国といはざる得ない。それにしても累代の国民の国苦と労働の果実が国を支えて来たのだ。潰すのではなく作り生む努力が……。」

上記大佛の意見に対して、吉田甲子太郎は、次のように意義を唱える。²⁴⁾

「この文章は、われわれの日本だけが、非合理的な、超計算的な神秘性の上に立つてゐるといふ思想を表現してゐるやうに思はれた。私には、新日本再建の出発に当たつてかういふ思想のもとに再建の一步を踏みださせようとする事は、甚だ危険のやうな気がしてならない。

◇この無念な敗戦もある意味では、無計算と非合理主義の結果だつたといへるのではあるまいか。然るに今、重畳する艱難を乗り越えて、わが民族の前途を切り拓かうとする時に、またまた計算を無視して、合理性に背いて、その難事業が成し遂げ得られるかの如き印象を興へる危険を包蔵する文章を国民に示すことは、何としても賛成しかねる扱である。

◇精密な計算、完璧な合理性、その上にこそ新日本に再建せられるべきで、この二つなくしては新日本の興隆は覚束ないと思ふ。」

この吉田の反論に、大佛次郎は、次のように答える。

「あれは一種の合理主義的な立場からの国史観とも見られませんか。私は国史の特徴として現われてゐる東洋的な暗闇を、あゝいふ表現で指摘したので、それでなければあの文章の次に「政治の技術は下手糞で」とか「余計な犠牲を出しながら」といふ言葉も持ち出さずに済ましたでせう。「日本の大をなしたのは不思議」と記したのも、国史のさういふ合理的でない発展の内臓する危機を指したものであり「恵まれた国」と特記したのは、やはり同じことで幸運に済んだが非常に危険だつたといふ意味を匂わせてをります。²⁵⁾

もちろん、どの一瞬がその過程を捉えたものかについては異論があろう。しかし、新聞紙上における議論の中で、「合理主義だけでない国史の良さ」を述べることは許されない当時の時代の縛り

があったことを物語るものではないか。それゆゑに、吉田の反論に大佛がたじたじになっている姿が文面に表われている。まさに、「合理性」をめぐって、敗戦直後に構成され「科学技術」を頂点とする知の枠組みが権力を持ち、そのヘゲモニーを獲得するプロセスを表わすものである。

1946年12月6日の『朝日新聞』の社説は、これまでの言説が真理と確定させるかのように、

「科学思想、科学技術の立ちおくれは、無駄な開戦と、したがつてまた敗戦の主要な原因であつた。そして、生産、生活、文化の全部面にわたる日本再建の方法的根底をなすものもまた科学技術である。」

と、科学技術の進展がすべてを規定するかのような言説に発展する。

このように、*JACK AND BETTY* が発行されるまでに、科学技術こそがすべてを決定するかのような知の権力を持っていたのである。そして、この言説が社会の中で客観的現実となり、人々の“認識枠組み”が構成されたのである。だからこそ、*JACK AND BETTY* を手にした生徒達は、少ない取り扱いであつたにもかかわらずバイアスのかかった「科学技術」の認識にいたり、さらにその認識から「科学技術の生活への浸透」といったアメリカのイメージがより確かなものとして再構成されていったのであろう。

JACK AND BETTY が発行された年の昭和24年(1949年)、2ヵ月3週間のアメリカ旅行をした片山哲は、

「豊富なる物資を思う存分用い科学知識の浸透を徹底化しているところにアメリカの特色がある。それらはあらゆる面に現れているが飛行機、自動車、電話がトップを切つている。現在はまさに飛行機の時代だ。私もアメリカでは全部航空路で、汽車に一つも乗らなかつた。…中略…自動車に至つては何んといつていゝかほとんど形容の言葉のない程、数多くの行列をなしてアメリカ全土にあふれている。ロサンゼルスでは市民平均二人に一つのカーを持つていゝのだから豪勢にビックリする。²⁶⁾

と、アメリカの印象を語る。片山のアメリカを見

24) 吉田甲子太郎「計算と合理主義」、『鉄筆』の欄 1945年8月23日

25) 大佛次郎「合理・非合理」、『鉄筆』の欄 1945年8月31日

26) 「さらばアメリカ すべてが大がかり うらやましい機械力」1949年8月19日

る枠組みは *JACK AND BETTY* を通してアメリカを見た子どもたちと同じものであり、当時の時代が構成した“認識枠組み”はあらゆる場面で再生産されていた。

6. アメリカ文化受容

1950年代に入ると、「科学技術」を頂点とする“認識枠組み”は日本人々に完全に自己内面化され、現実の生活の実用化に向け浸透する。

「依然として猫も杓子もアメリカ渡航時代、土産話はきまつて、電気冷蔵庫と電気洗濯機のある、アチラの台所の話である。そのシリ馬にのつたわけでもあるまいが、日本でも戦争前は有閑階級の飾り物であった電気洗濯機がこのごろでは実用品の仲間入りをし、五つのメーカーの生産額、月二百台では、とうてい需要に應じきれないところまできたようだ。

実用化とはいうものの値段が二万六千円から最高6万七千円ときいては、庶民にとっては戦前とかかわらぬタカネの花というもの。といって、生活の合理化いまだ遠しとなげくには当たらない。この五月から、都のモデル生活館である新宿生活館が簡易洗濯というのをやつており、これは各地に盛んにしたいものである。²⁷⁾ さらに、

「電気冷蔵庫といふ表題を見ただけで「ああ、又アメリカ文化の話か、もう分かつたよ」といふ人が、相当あることだろうと思ふ。²⁸⁾

と、「電気冷蔵庫」と言えば、それは「アメリカ文化」とイコールになってイメージ化される。「科学技術」を頂点とする“認識枠組み”というフィルターを通して見たアメリカ、そのアメリカは家庭電化製品を始めとする「生活に科学技術が浸透する国」としてイメージ化された。

「もう三年前の話であるが、二十年ぶりにアメリカを見て驚いたのは、電気冷蔵庫の普及であった。都會では、かなり下層階級といふべき街

の労働者、例えば道路掃除夫のような人の家にも、電気冷蔵庫はあつた。…中略…それから話しは少し突飛になるが、今度の戦争に、アメリカが勝つて、日本が敗れたのも、先方に電気冷蔵庫があつたからではないかと思うふ。今度の戦争の勝敗は、彼我の生産能率の隔絶した差異によつて決定されたのである。²⁹⁾

戦争の敗因までもを家電製品の普及率と考えていく思考の筋道は、「科学技術」を頂点とする“認識枠組み”を介して、アメリカ文化を受容していくプロセスでもあった。

『週刊朝日』には、国税庁の発表した昭和29年度（1954年）の全国高額所得者として、

「1位 一億一千三百万円

三洋電気社長井植歳男氏

2位 九千五百万円

松下電器社長松下幸之介氏³⁰⁾

を紹介し、家庭電化製品の普及によって供給する側の所得増を表わす。さらに「電気機具からみた七階級」と題した次のような記事が掲載されている。

「ところで、その電気器具だが、あなたの家庭には、どんなものがあるかしらべて見たことがあるだろうか。

電灯、これは多分あるでしょう。これは電気器具の最低線で、かりにこれだけの家庭を第七階級としよう。

次はラジオとアイロンが加わったのが第六階級。

電熱器とトースターで第五階級。

ミキサー、扇風機、電話で第四階級。

電気せんたく機で第三階級。

電気冷蔵庫で第二階級。

テレビ、真空掃除機で第一階級。³¹⁾

「家庭電化製品」の所持というもののさしでもって人々を序列化する言説が権力を持ち、人々を「家庭電化製品」取得の方向に走らせる作用へ働くものであろう。さらに続けて、

27) コインランドリーの草分けてき存在である「ダンプ・ウォッシュ」の紹介記事。（「簡易洗濯」『週刊朝日』、1951年7月29日）

28) 前掲書

29) 中谷宇吉郎「電気冷蔵庫」『オール読み物』、1952年6月

30) 巻頭「洗濯機と冷蔵庫 家庭電化時代来る」『週刊朝日』1955年8月21日

31) 前掲書

「しかし、この電化のそれぞれの段階で所得まで割り出される、という人もあるので、一つやってみよう。

国税庁の調べによると、現在、年間収入百万円以上の者が十二万三千人。五十万円以上が六十万人。三十万円以上が百八十八万人という数になるそうである。

電気せんたく機はすでにすいてい七十万台普及しているのだから、数の上では年収五十万円以上の人たちが、まず、第3階級の電化生活を営んでいるか、あるいは営みうるということになる。年収五十万円といえば、月に割って四万円、税金をさっぴいて手取り三万五千円という生活である。課長クラスの検討だろう。』³²⁾

と、家庭電化製品の取得いかんが個人の値うち、さらに社会的地位にも及ぶものとの構築された知の権力が、人々に襲いかかる言説である。まさに、敗戦直後構成された「科学技術」を頂点とする“認識枠組み”がアメリカのイメージを形成し、次にアメリカのイメージから「科学技術の生活への浸透」の必要性が人々に自己目的化されたのである。そして、「科学技術の生活への浸透」としての家庭電化製品の所有度が人々の価値を決定づけるかのような言説が知の力となって作用し、人々の主体的ベクトルが生成された。それゆえ、戦後のアメリカ文化受容の過程とは、「科学技術」を頂点とする“認識枠組み”を介しての家庭電化製品の普及過程でもあった。

おわりに

JACK AND BETTY 分析を通して導かれた「食べ物」や「科学技術」に対するバイアスのかかった認識から、当時の人々が何に強く目が注がれていたかといった時代の特徴が読み取れた。特に「科学技術」に関するバイアスのかかったまなざしは、敗戦直後に構築された「科学技術」を頂点とする“認識枠組み”がフィルターとなってアメリカを捉えたことから生成された。そして、その“認識枠組み”を介して構成された「科学技術の浸透したアメリカ」のイメージが、“科学化さ

れた生活”に結晶化され内在化されるに至った過程こそが、戦後日本のアメリカ文化受容のスタートであることが明らかになった。

「戦後日本のアメリカニゼーション」研究に向けての今後の課題としては、“科学化された生活”に結晶化されたアメリカのイメージが作り出した戦後の日本の主体的な文化がその後どのように独自の歩みを行ったのかを明らかにしていくことにある。さらに、戦前の日本の連続性と非連続性を検討する上で、敗戦直後の認識枠組みとしての“科学技術”が戦中・戦前においてどのような文脈のもとで使用され、いかなる位置にあったのかの検討も試みたいと考えている。

参考文献

- 萩原恭平・稲村松雄・竹澤啓一郎 *Jack and Betty, English Step by Step*, 開隆堂出版、1948年(復刻版 高梨健吉・出来成訓監修『英語教科書名著選集』29巻大空社、1993年)
- 萩原恭平・稲村松雄・竹澤啓一郎 *REVISED, JACK AND BETTY, ENGLISH STEP BY STEP*, 開隆堂出版、1953年(復刻版1992年)
- 稲村松雄『アメリカ風物誌』開隆堂出版、1959年
- 作田啓一「戦後日本におけるアメリカニゼーション」『思想』第四号岩波書店、1962年
- 海後宗臣・清水幾太郎編『資料戦後二十年史 5 教育・社会』日本評論社、1966年
- Peter L. Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality*, New York, 1966. (山口節郎訳『日常世界の構成 アイデンティティと社会の弁証法』新曜社、1977年)
- Herbert Blumer, *Symbolic Interactionism : Perspective and Method*, Prentice-Hall 1969 (後藤将之訳『シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法』勁草書房、1991年)
- Michel Foucault, *L'Histoire de la sexualité, I, la volonté de savoir*, Gallimard, 1976. (渡辺守り章訳『性の歴史1 知への意志』新潮社、1986年)
- 亀井俊介『メリケンからアメリカへ』東京大学出版、1979年
- 山本明『戦後風俗史』大阪書籍、1986年
- 柳瀬尚紀編著『『ジャック&ベティ』の英語力で英語は読める』開隆堂出版、1987年
- 紀平健一「戦後英語教育における Jack and Betty の位置」『日本英語教育史研究 第3号』、1988年
- 安田常雄・天野正子編『戦後体験の発掘—15人が語る

32) 前掲書

- 占領下の青春』三省堂、1991年
- 『JACK and BETTY』あの日あの頃』（復刻版付録ブックレット）開隆堂出版、1992年
- 今野勉・堀川とんこう『ジャック・アンド・ベティ物語 [いつもアメリカがあった]』開隆堂出版、1992年
- 高梨健吉・出来成訓監修『英語教科書名著選集』（第3期21巻～29巻・別巻）大空社、1993年
- Barry Markovsky, “Social Perception”, in Martha Foschi and Edward J. Lawler (ed.), *Group Processes, Sociological Analyses*, Nelson-Hall, Inc, 1994.
- Vivien Burr, *An Introduction to Social Constructionism*, London : Routledge, 1995. (田中一彦訳『社会的構築主義への招待 一言説分析とは何か』川島書店、1997年)
- 安田常雄「アメリカニゼーションの光と影」中村政則・天川晃・尹健次・五十嵐武士編『戦後思想と社会意識』（『戦後日本 占領と戦後改革』第3巻）岩波書店、1995年
- 吉見俊哉「アメリカナイゼーションと文化の政治学」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『現代社会の社会学』（『岩波講座 現代社会学』第1巻）岩波書店、1997年
- 岩本茂樹「ブロンディ（1）—戦後日本におけるアメリカニゼーション—」『関西学院大学社会学部紀要』第78号、1997年
- 岩本茂樹「ブロンディ（2）—戦後日本におけるアメリカニゼーション—」『関西学院大学社会学部紀要』第79号、1998年

Americanization in Japan after the second World War: On *JACK AND BETTY*

ABSTRACT

The English textbook *JACK AND BETTY* for junior high school students was published in 1948. The writers who had the aim of core curriculum depicted the life of typical American middle-class families, with many national holidays and traditional annual events included. Students, however, got the perception that American families enjoyed a family life full of scientific technology, cars, household electrical appliances, etc. They had an image of America as a rich and democratic state.

I think their ‘misperception’ reflected their underlying consciousness in those days. On this assumption, I classified the lessons of *JACK AND BETTY* and took statistics on them. The results show that the items of scientific technology were considerably over-represented in the minds of students. I go on to examine the concept of ‘Americanization’ that has occurred during the post-war years in Japan by exploring the mechanism which produced this type of bias or ‘misperception’.

Key words: *JACK AND BETTY*, bias, Americanization